



真娘のタマキ



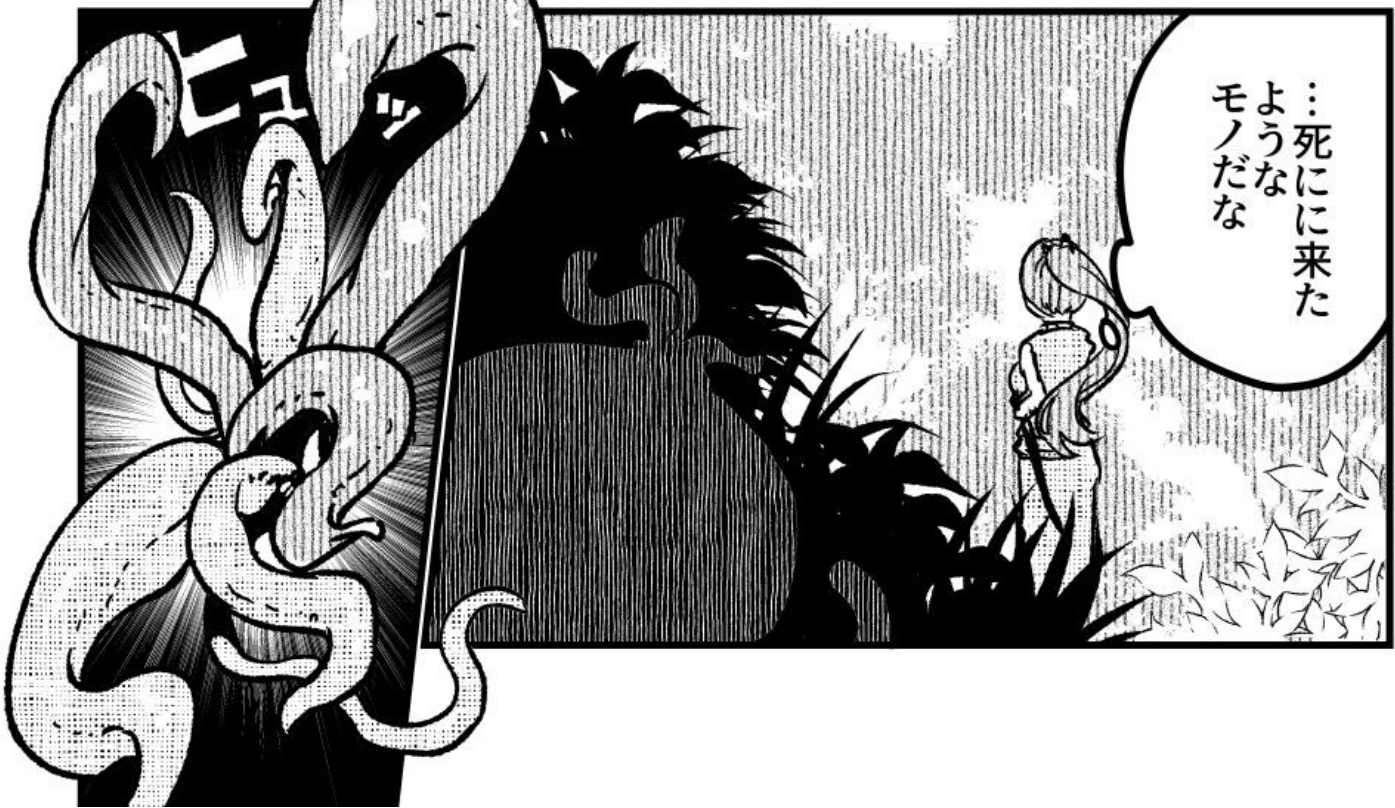
ここが「危険区」か……


……

思ったより普通の森のようだが……

それでもないか

本当にいいのですか？





「油断したか...」
気づけば様々な太さの
無数の触手に絡め取られ、
私は宙に浮いていた。

不自由な首をなんとか回すと、
はるか下の地面には花のような
カタツムリのような奇妙な生物が
触手をくねらせているのが見える。
「植物だから気配が希薄なのか...」
今更だが敗因を推測し、私はため息を付いた。

「!?…なんだ？」
このまま縛り殺すのかと
覚悟を決めた私に、
触手は締め上げるでもなく
肌に這わせるように
その弾力のある
緑の腕を侵入させてきた。

樹液なのかあるいは消化液か、
やや湿った感触が
服の下にまとわりつくのを
息を詰めて見守ることしかできない。





袖口や襟から無遠慮に
這いずり回る
触手を感じながら、
私は抵抗する気も起きずに
されるがままになっていた。

触手の量は多いものの、
一つ一つの力はそこまで強くなく、
おそらく全力で抵抗すれば
逃げることも可能だろう。

「...しかしここで生き延びたところで...」
戦いに明け暮れた心と体が
もう休息を欲しているのがわかった。

「……アッ！」
ビリビリと音を立てて
触手が服を切り裂いていく。
着たきりスズメの摩耗した服は
いとも簡単に布切れになり、
肌から離れて大地に落ちていく。

「妙だな。」

湿った服を器用に剥がしていく触手は、

それでも相変わらず締め殺す

様子はなく、あくまで自由を奪い

抵抗させないだけにとどめているようだ。

「……そういえば聞いたことがあるな。」

私は噂程度に聞いた奇妙な生態の

モンスターの話を思い出した。



そのモンスターは植物系あるいはローパー系のモンスターで、見た目は普通のモンスターと変わらない。



しゃっ

にゅる

しかし繁殖形態が他のモンスターと異なり、オスしかないモンスターなのだという。ではオスだけでどう殖えるのかという...



「……やはりそうか。」
スルリ、と細い触手が秘所に
到達するのをみて、
私は確信した。
オスしかいない代わりに
他の種族のメスを苗床とし
実を結ぶ……。
つまりこいつの狙いは
私の子宮なのだ。

「……」
たつぷりと液体をにじませた触手は
ただたどしきすら感じる速度で
ゆっくりと内部へと侵入していく。

ムニャ

じゅぐ
しりゅ



「あ……く……っ。」
今まで誰にも触れることを許したことがない場所を撫でられ、違和感に身を振ると、逃すまいとでもいうのか体を這う触手が増えた。



ねっとりとした粘液を体中に擦り付けられ、さつきよりやや強くなった締め付けが、腕や胸に食い込んでいく。



突然体内で爆発するような
衝撃を受けて私は体を跳ねさせた。

びあ!!

ビクッ

ゴッ

ゴッ

おそらく最奥部まで到達したららしい触手が、
突然大量の粘液を吐き出したのだ。
入り切らず漏れ出した体液が、
尻を伝ってぼたぼたと大地へ落ちていく。

「あ…なんだ…うふ、うあ…」
細い触手は役目を終えたのか、
スルスルと体外へと脱出し、
他の触手と同様体に絡みつく。



おそらく大半は吹き出てしまったとはいえ、
体の中にのこったにちやにちやの液が、
少しゆすられ擦り合わされるたび、
私の背筋をゾクゾクとした感覚が走った。

「ん…っ…♡」
こんどは先程よりも
やや太さをました触手が現れ、
未だ謎の熱に侵された
蜜口に擦り付けられる。

んわっ…

？

ピン

さっきよりもしなやかですこしだけある
凹凸が入り口に引っかかって
こすれるたびに、身を振るような
快感の波が全身に広がるのがわかった。
きつとさっきの液体には媚薬効果があるのだろう。





「ああああっ!!!」
 しばらくそうして具合を
 確かめるようににこすりつけられていた触手は、
 もう十分だとも言ううように
 突然侵入を始めた。
 さつきよりも太くて
 ゴツゴツとした触手は、
 蛇のようになねりながら
 体内を進んでいく。

ズル
 ゴッ
 ゴッ
 ゴッ

あああ

媚薬によってしびれきった
 内部を強かにこすられ、
 かき回されて、嬌声が止められず、
 私は空中でのたうち回った。

「あぁあぁ♡ふぁ…あぁ♡」
触手は休むことなく内部をかき回し、
膣道をぐいぐいと押し広げ、
つぶつぶの表面で快感を掻き立てる。



同時にぎゅぎゅの粘液も吐き出ししているのか、
出し入れのたびに泡立った音が
ぶじゅぶじゅとして、
股間から足先までゆっくりとつたい
落ちて行くのがわかった。



「あ、なん…なに…なに…あ、ああ♡」
体が熱い。頭がしびれて目がチカチカする。
生まれて始めて感じる女の快樂に
私は戸惑いを感じるが、
触手もそして私の体もそんなことは
知ったことではないと勝手に上りつめていく。

あーっ

どーっ

ゼッ

ビク

また最奥で弾けるような衝撃を覚えて、
いままでで最高に強い快樂に
私の視界は真っ白になった。

あれから…
あれからどれくらい経ったのだろう。
何度か夜がきて朝が来たのは覚えているが、
正確な数は覚えていない。この植物は飽きもせず、
私の体を好きなように貪っている。

私の体もなぶられすぎて変質してしまったのか、
空腹や睡魔を覚えることはほとんどなく、
ただ与えられる快楽を
体いっぱい受けて止めていた。



「ひ、…そこっそこ♡こねちゃっ♡」
とくに胸の先の部分をこねられると、
奥まで触手を入れられたときのように
体が跳ねてしまい、ビクビクと私は身悶えた。

どろろ

ト
ト

くっ
くっ

谷間を触手でズリズリと前後されると、
まるで膣内でそうされたかのように体が反応し、
ジユンと股間から液体が垂れた。
いつの間にか私はわたし自身から
粘液を出せるようになっていた。



「あ…あふ…♡あぁ♡」
いいように弄ばれた体は股間だけでなく
全身の皮膚がこすられるだけで
快感を覚えるようになってしまっている。

触手が糸を引きながら体に
まとわりつくだけで腰が揺れて、
体が勝手に記憶した快感を思い出し、
何もされていないのに
気持ちよくなってしまうのだ。



「お、…おあっ♡あっ♡は♡す♡…あああっ♡」
与えられる触手も多彩なものになっていた。
今日はつぶつぶだけを集めたような
ブラシのような触手の先端で入り口だけを
執拗にこすられた。



いっしょ
いっしょ

舐めるように先を動かされ、
あるいは洗うように前後にこすられ、
私は翻弄される。



「あ、ひっ♡ひっ♡あ♡」
プシュー♡と音を立てて粘液が吹き出ると同時にいつまで立ってもなれることのない快感が私を襲う。
その粘液すらも潤滑液にしてイッたばかりの膣口をこすられる。

「あああ♡♡やめっ♡もう♡もうイッてる♡
イッてるから♡」

体を必死に動かすが、拘束されているせいで尻を振ってねだっているような動作しかできず、私はまた止まらない快感の波の中に溺れることとなった。

淫欲に溺れた生活が続けるうち、私の体は段々と変化していく。肌の色は人間とは思えない青みがかつた色へと変質し、指や足先はあの触手のようにうねりを帯びて動くようになった。

腹部には不思議な模様が浮き出て、時たま僅かな光を帯びる。明らかに異常な事態なのに私は不思議と焦りや苛立ちを感じなかった。



むしろこうして「人間ではないなにか」
になっていくことに奇妙な
満足感を覚えていた。
人間のしがらみから逃れ、
新しい生命となっていくことが
素晴らしいことのように思える。

太陽のもとで欲望のままに
生きる生活は自由で
とても楽しかった。



「くぅ…♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
文様のあたりを中心にしびれるような
快感が走り抜ける。
じゅんじゅんと股間が濡れ、
私は思わず自分の体を抱きしめた。
しつとりと濡れた腕の肌質は
もはや人のそれではなく、
自分の体なのに触手に
まわりつかれたときのように
錯覚する。

「あ…はあ♡」
バサツとどこかで音がしたが、
快楽に溺れる私にはそれが
髪の毛が落ちる音だとは
わからなかった。



すっかり変わってしまった体だが、
私はその使い方方を誰に教えられなくても
理解していた。

それこそ何も教えていない赤子が
ハイハイをしてあるき出すように、
その触手や粘液を使うことができた。

そしてその本能とも
いべき思考は、
常に快楽を求めて蠢いた。



「ふう…♡ふふ、はあ…♡」
熱を帯びた吐息を吐き出しながら、
ゆつくりと触手を後方へ伸ばす。
気分を高めるようにいくつもの触手で
四肢をなで上げると、
ぬるぬるとねとつく触手が糸をひく。

ピク
ム

くい、
フル…

「んく…あ♡はあ♡あふ…♡」
みだらな姿勢なのも気にせず、
私は夢中で細い触手で
入り口を磨り上げた。



「お♡フツ♡ツファー♡フリー♡」
足りない足りないと言っようたに
キョんキョんと触手を求める子宮に、
更に太い触手をグリグリと奥までねじ込む。
すでに今までの淫蕩な生活で
トロトロに溶かされた蜜口を
さらにギチギチにまで伸ばす。

私は獣の唸りのような声で
快感を享受した。
視界に星が飛び、
かつてに腰が揺れ動く。
そろそろ限界が近い。



「~~~~ツ♡♡ああ~~~~♡♡あ~~~~♡♡あ~~~~♡♡」
ドクンドクンツッ激しいオーガズムと共に
すべての触手から濃い白濁液が吹き出した。

膣道内にみちみちに
詰まった触手も例外ではなく
大量の液を吐き出し、
膣内を更に押し広げ、
溢れた分が水鉄砲のように
ビュッビュッと飛び出す。
そのたびに腰がガクガクと震え、
頭にバチバチと電気が走った。



私が完全に姿を変えてしまっただけから、
このモンスターは暇さえあれば私を思う様貪り、
体中ヌルヌルにして快感を与え続けている。



トロロオオ!

自分でも媚薬粘液を出せるようになったとはいえ、
やはり親とも言うべきこのモンスターから
与えられる粘液はいつとう上等で
私は言葉が通じているのかもわからないのに
必死にそれをねだるのが日常だ。

「ね、それ…♡♡早く…♡♡♡♡」
高々と鎌首をもたげる太い触手から、
少し揺らしたぐらいでは垂れないぐらい
濃い粘液が分泌されている。

あたりには青臭いような甘い匂いが
立ち込めていて、
否が応でも気分が高揚してしまう。



「ひうっ♡」

上に注意を向けているうちに
いつの間にか触手が乳首を絡め取っていた。
痛いぐらいに引っ張られるが、
痛みよりも快感のほうが勝り、
ジンとした熱を下腹部に感じる。

ぐくぐく

ふっ♡

ふっ♡

ぐく

ぐく

ぐし♡

先をこねこねとされるのも、
ギョツと縛られて
しごかれるのも、
もうなんでも気持ち良くなるように
調教されてしまっている。



「あ……ハア♡ハア♡ハア♡はや……くうッ♡♡♡」
高濃度の媚薬をたっぷりまとわせた触手が
がのそりと移動してくる。
あれを口に含むと口内の触れた場所からしびれていって、
飲み込むと胃から直接
全身に焼ききれるような



快感の電流が走ることを
私は知っている。
想像だけで喉がなる
強い快感が欲しくて欲しくて、
私はみだらに腰を振った。

大量の粘液を胃に収め、自ら分泌した粘液とたっぷりかけられた粘液で泡立った体を、たくさんの触手が取り囲む。

ドキドキ♡

でく♡

足をこれ以上無いぐらい開かれても、身動きがとれないように縛られても、私にはもう羞恥よりも今後の期待のほうが大きくて、膣口からはよだれのように粘液を垂れ流した。





ぶびゅっぶじゅっ

「あ♡ああああ♡アーツ♡」

快感で充血しピンと立ったクリトリスに
更に粘液を叩きつけられて、
強すぎる快楽に私は必死で身を振る。

あ

くっくっくっ
くっくっくっ
くっくっくっ

アアア

キム

♪♪♪
♪♪♪
♪♪♪

しかしたくさんさんの触手は
ぬめる体をいとも簡単に固定し、
逃げることを許してくれない。

「あっ♡あ♡あひ♡あー♡♡」
じゅるじゅるに溶けたオ○ン○に
突然深い楔を突き立てられて、
私は動かない体をそれでも何度も跳ねさせた。



体の奥から全身に何度も甘い電流が流れ、
痙攣する膣道はぎゅうぎゅうと触手を掴んで離さない。
触手も中で締められて、
粘液を出そうと脈動しているのがわかる。

「~~~~~♡♡♡」
ひとときわ強く子宮を突かれ、
ブビューッと音すら聞こえそうなほど
粘液を叩きつけられて、一気に天国まで上り詰める。

視界はにじみ、脳は溶けて、体はビクンビクンと
壊れたおもちゃのように跳ね回った。



ビクン
ルル

もう何日も食料らしい食料を摂っていないが、
全く空腹を覚えない。
代わりに体の乾きを覚えることが増えた。
おそらくこのモンスターは見た目通り
植物に近い食性なのかもしれない。

その影響を受けた私も、こうして時々水にひたり、
日光を浴びると生き返るような心地になる。



お互いに触手を絡めながらはしゃげばしゃげと水を掛け合う。
言葉はないが私にはだんだんこのモンスターが
考えていることがうっすらとわかるような
気がしてきていた。

あくまで私の気のせいかもしれないが、
おそろしくこいつは私を食べたり
殺したりするつもりは無いのだろう。

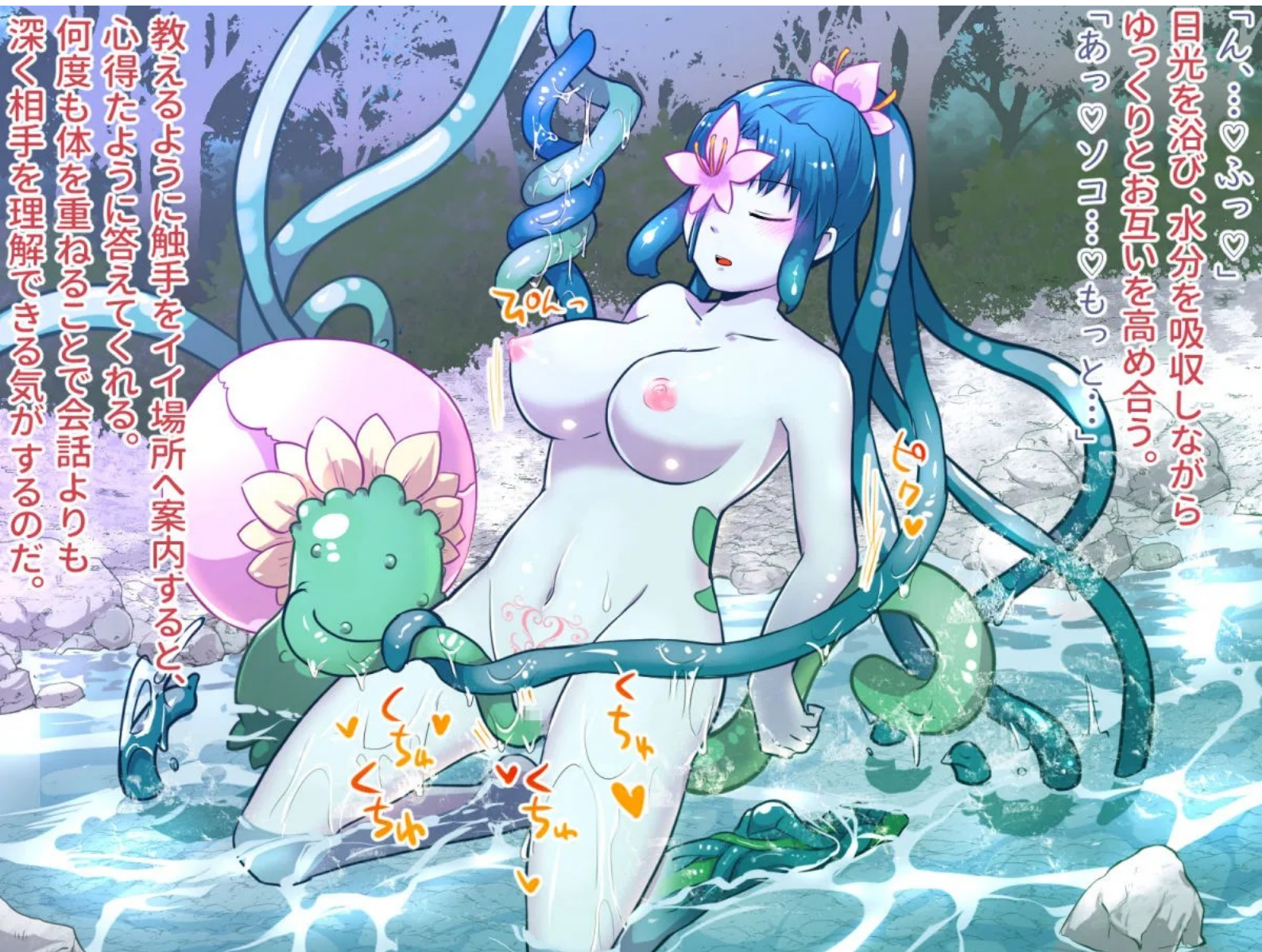




絡め取った触手を自ら秘所へと導くと、
モンスターは嬉しそうに体を揺らして
粘液を吹く。
水ですぐに流れてしまうが、
粘液もどんと溢れ出すので何も問題はない。

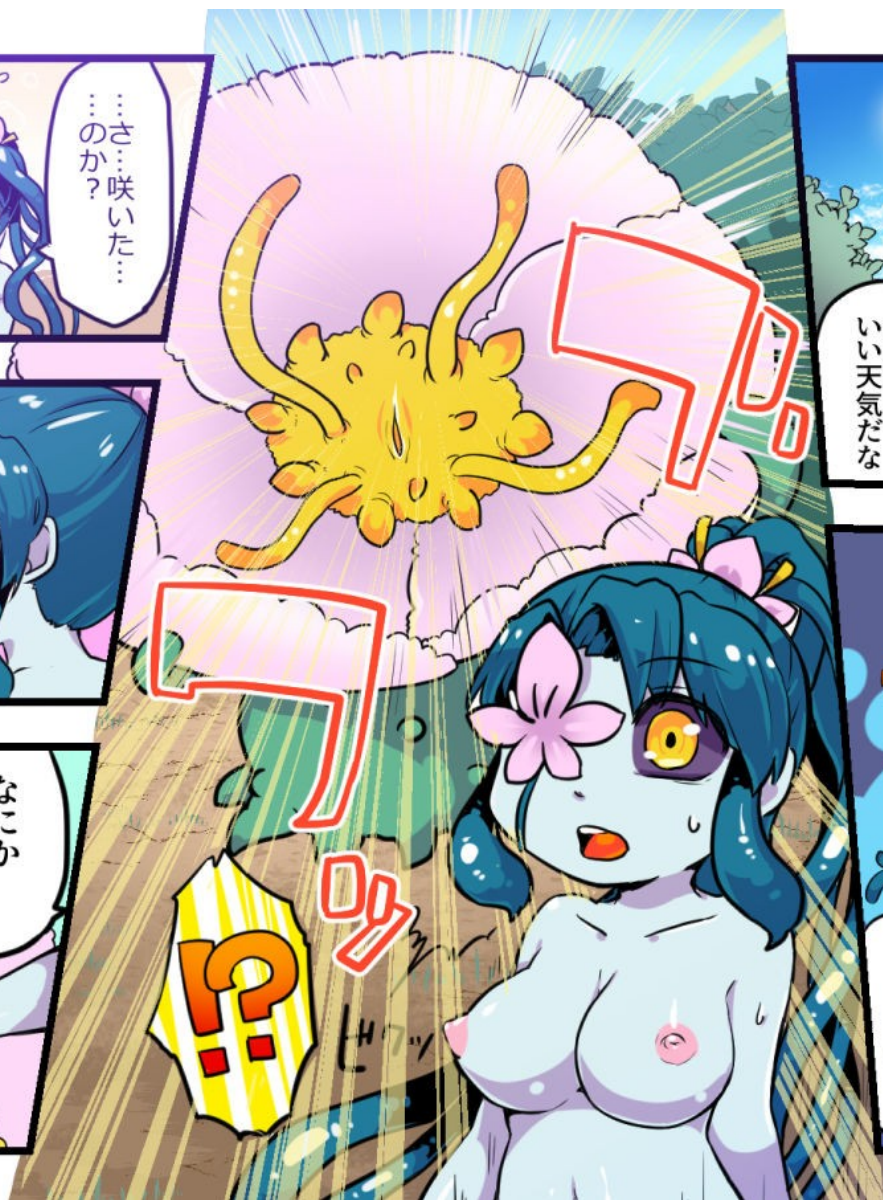
「ん、…♡ふっ♡」
目光を浴び、水分を吸収しながら
ゆっくりとお互いを高め合う。
「あっ♡ソコ…♡もっくと…」

教えるように触手をイイ場所へ案内すると、
心得たように答えてくれる。
何度も体を重ねることで会話よりも
深く相手を理解できる気がするのだ。





「んん♡あ…♡」
深い深いところまで絡み合い、
こすり合い、より詰める。
私は生まれてはじめて幸せというものを感じた。



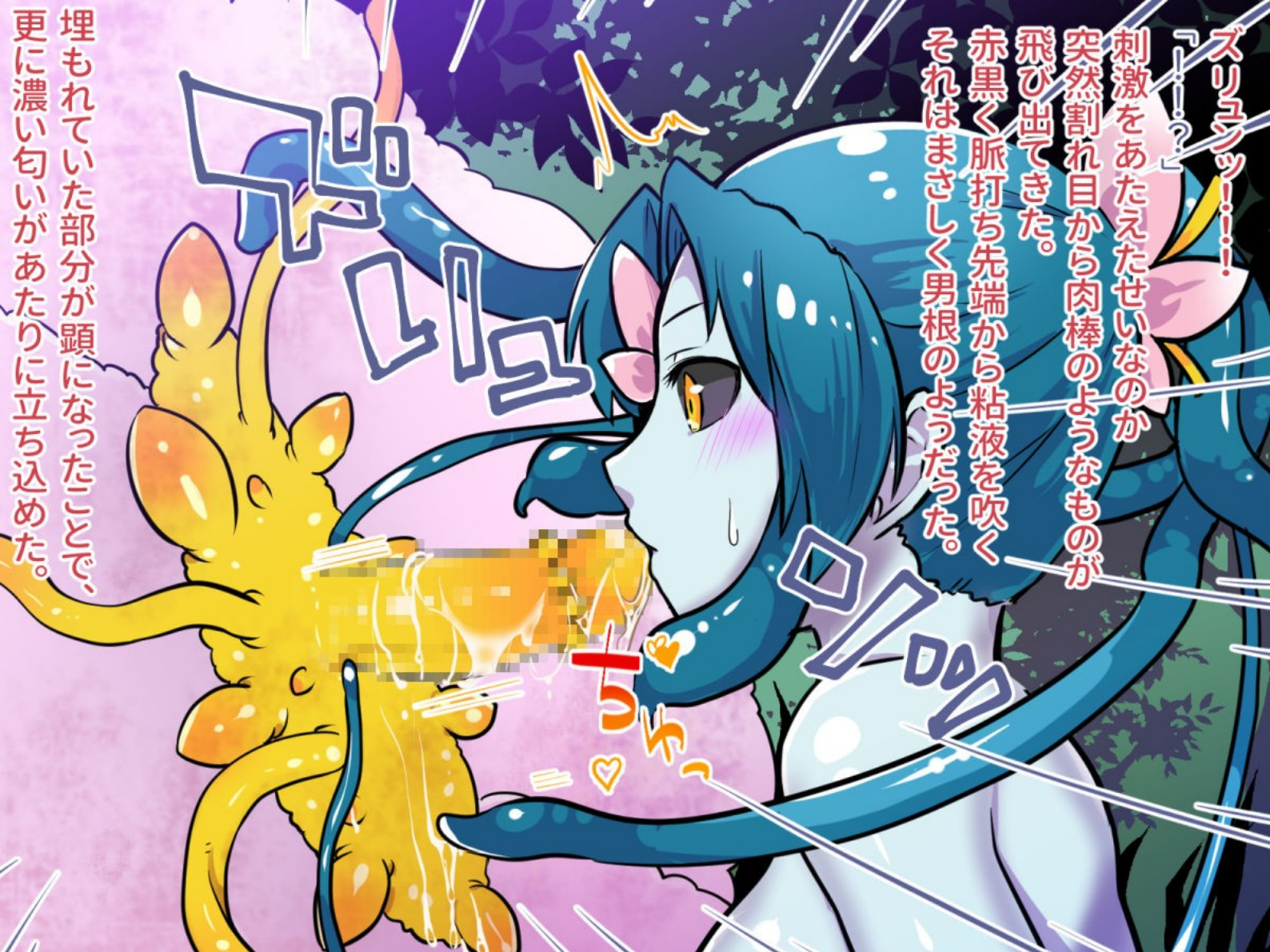
恐る恐る開花した花の中心を覗き込むと、
中央の割れ目からあの特濃の粘液を更に
濃く煮詰めたような甘い香りが漂う。
それは花の中心部にあるくぼみから
香ってくるようだった。



誘われるように舌を這わせると、
ヒクヒクと蠢いている。

ズリユッ……!!
刺激をあたえたせいなのか
突然割れ目から肉棒のようなものが
飛び出てきた。
赤黒く脈打ち先端から粘液を吹く
それはまさしく男根のようだった。

埋もれていた部分が頭になったことで、
更に濃い匂いあたりに立ち込めた。



たまらずに先端にキスをして舌を絡めると、
今までも感じたことのない濃厚な粘液が
口の中で粘って糸を引く。

ゴクリと音を立てて飲み下すと、
度数の高いアルコールを飲んだように
急激に酔いが回る感覚に陥った。
体が熱くなって頭がとろりと溶けてくる。



「んっ…♡んぐっ♡♡んん…っ♡♡」
もっともっくと奥まで肉棒を
加えこんで吸いあげる。
硬いソレは脈打ちながら粘液を吐き出し、
ねとねと口内を擦り上げる。

そのたびに口から股間まで直接快感が突き抜けた。



「ぶびゅぶゆ♡♡♡
んぢゅっ♡んぐん♡♡♡」
喉の最奥で直接胃袋を直指すかのよう
に特濃の粘液が吐き出される。



えづくほどに強烈な刺激に
私は目をむいて快感を享受した。

大量の粘液を吐き出した剛直は
未だ萎える様子がなく、モンスターは
花を上に向けて触手で私を持ち上げると、
その上に優しく導いた。
跨がれ、とでもいうように足を開かせる。

いや、実際跨がれと言っている。
この棒を…性器をもって身をつなぐのを
望んでいるのだ。



バクンッ
私が中心に膝立ちになったのに合わせて、
開いていた花弁が勢いよく閉じた。
当然私は下半身をガッチリと
掴まれる形になり、身動きが取れなくなる。

多少の圧迫感はあるものの、
苦しいほどではない。
「……これは……こういう生き物なのか……？」

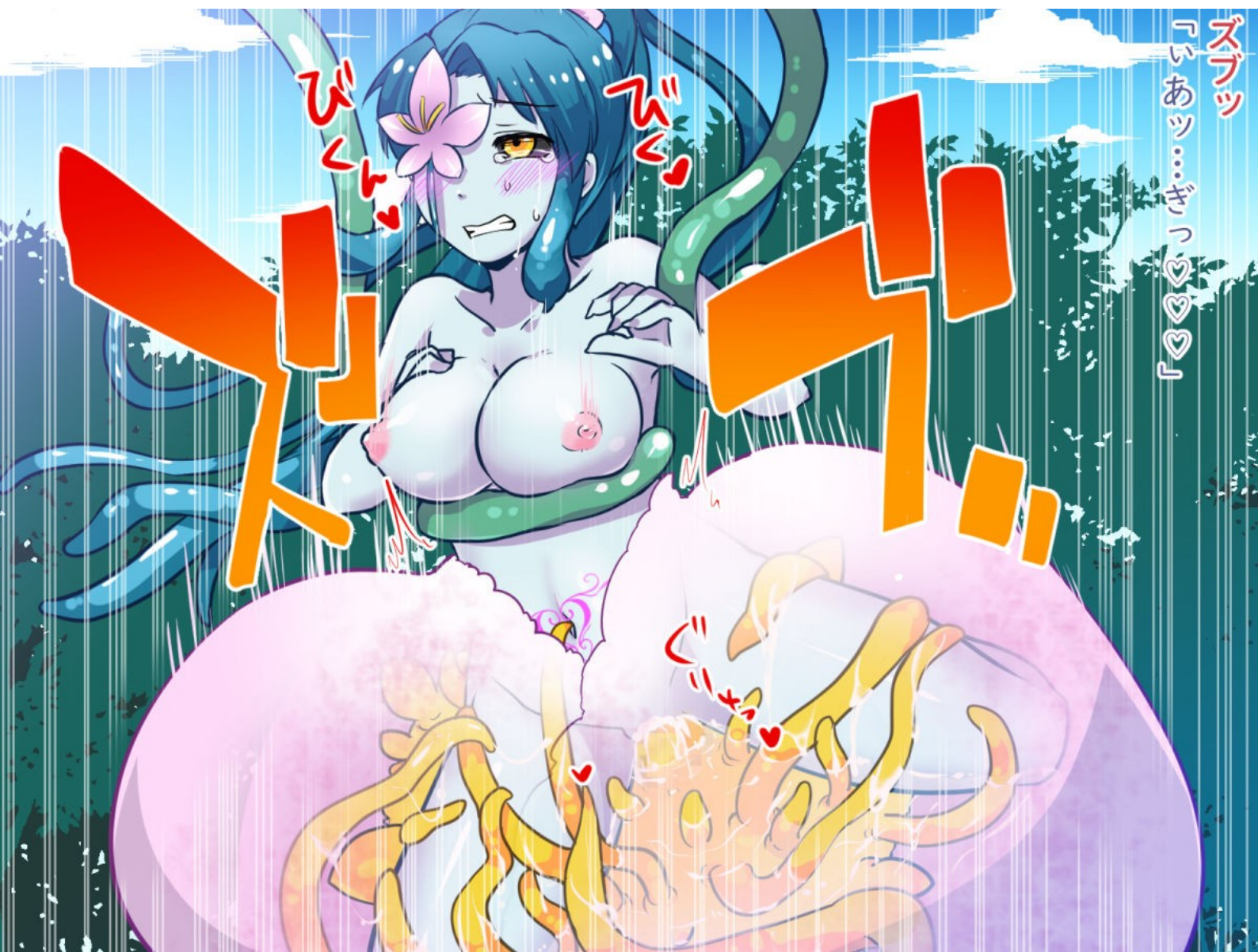


見えなくなってしまうた下半身部分では、
どこからか大小沢山の触手が生え、
肌を埋め尽くす勢いで
まとわりついているのがわかる。

「ふあ……♡ああ……♡」



全身をミニズが這うような数千の舌で
舐め回されるような快感と、
これから訪れるであろう
快感への期待に私は胸を震わせた。



ズブッ
「いあッ...ぎっ♡♡♡♡」

びくっ♡
びくっ♡

「あっあーッ♡あーッ♡あーッ♡あーッ♡」
とんでもない質量のものが膣内をかき乱し、
擦り上げ、突き回す。
体ごと全部揺さぶられて、
私はよだれを垂らして悦んだ。

きつと腹はこの強靱な男性器の形に盛り上がり、
前後するたびにゴリゴリと広がっている、
と想像するだけで身も心もイキツぱなしになる。



その目から私達はつながったまま、
暗くなっても明るくなっても
何度も何度も求めあった。



どのくらい時間がたったのかわからないが、季節を一つ分ぐらいはそうしてすごした気がする。



私達はもはや完全に一つの生き物として存在し、たまに水浴びと日光浴をする以外は淫蕩な生活を続けていた。そして、ある日、唐突に長いこと体内に収められていた楔がズルリと抜けるのを感じた。

同時にブラワリと花が開き、私は久しぶりに下半身を眺めて驚いた。

そこには妊婦のように膨れ上がった肚があった。栓を抜くことなく延々と注がれていたのだから当然だが、私はその肚の中になにか…そう、新しい命が入っているのを本能的に感じ取っていた。



「ツく…♡」
ゴリ、とナカのもの動くのを感じる。
産まれるのだ。多分。

どのようなものかわからないが、
モンスターとの…
いや『夫』との愛の結晶とも
言える我が子が
生まれようとしている。
私は快感とはまた別の悦びを感じた。



「あ……♡あー……出……出……出てくる♡」
グリグリと産道を押し広げ、
腹の中をゆっくりと下っていく。

多少の苦しさはあるが、
さんざん突き上げられた
その道は切れることもなく
ふっくらと広がって、
少しずつ命を外へと
運んでいくのがわかった。



「んぐッ♡ハー♡ッハー♡」
一番太いところが膣口を
ミチミチと広げて出ていく。

散々なぶられた膣口は
そんな刺激にも
僅かな快感を拾い上げ、
腰をしばれさせた。



「っは、……ふう……ふう♡産まれた……のか？」

出てきたのは赤子というよりは卵のようなココナツのような……植物系モンスターなので種というのが最も正しいのかもしれない。

つるりとした表面は産声さえもないもの、たしかに息づいているのがわかった。

そっ

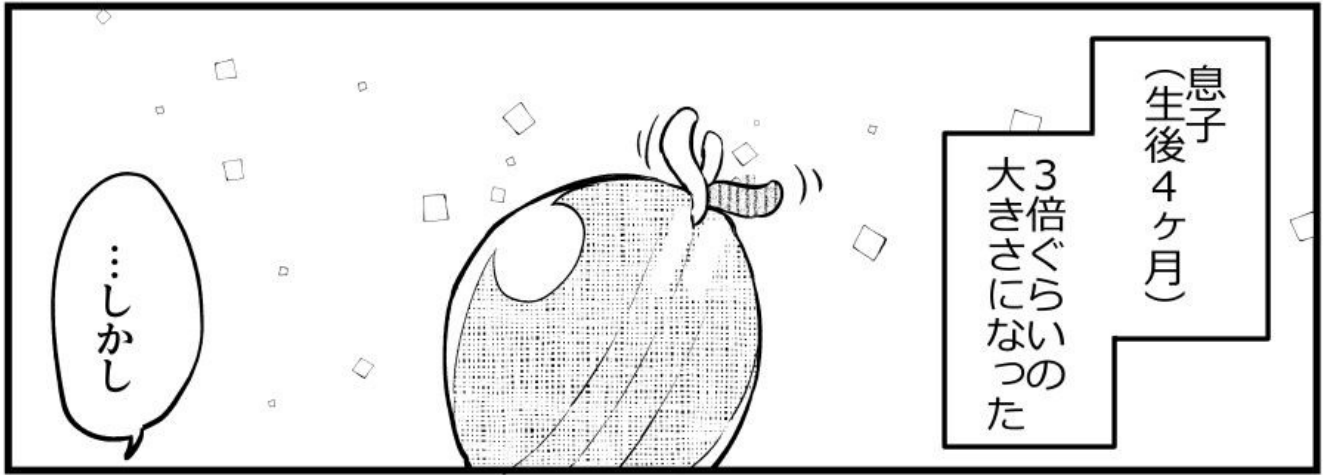
夫はソレをうやうやしく抱き上げると、私の胸元へと運んでくれた。

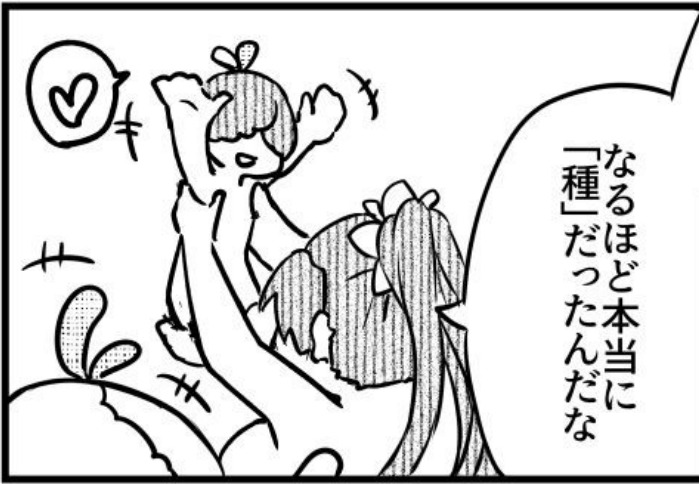


ほんのりと温かい種からは
わずかに触手が覗いており、
戸惑うように動いているのがわかった。

私は愛しいソレをなでて、
この上ない喜びに浸るのだった。







なるほど本当に「種」だったんだな

おお…



おあ!!

…

おあ!!



お前はなんかたりできないのか?

10カこわれこ

ん
ん
ん
ん
ん





